

「奄美出郷史」あとさき 学問と貧困のジレンマ



《奄美出郷史あとさき②》

近代の奄美諸島は、維新政府の自由化政策後、生命産業・黒糖の専売廃止、勝手売買を獲得すべく、島を挙げた大衆闘争に明け暮れた。

西南戦争で屍を乗り越え、島民側は運動に勝利するが、新たに本土商人の資本攻勢で負債漬けになり、ヤンチュ解放も一部に留まり、さらなる苦難史が。また、豪農・島役の島内特権層も、労働力解体で経営基盤が崩壊し多くが没落。さらに、国際的な経済変動で、黒糖や大島紬の価格が暴落。災害、伝染病も重なり、行き場を失った貧困層を中心に、産業革命下の関西を主に島外へ逃れる、大量の出稼ぎ流出が生じた。

一方、出稼ぎブームにややさがけ、豪農層らの子弟は、家運再興へ逸早く本土遊学。その進学熱の過熱と、「学問の世」にかける島民の執念がさらなる貧困化、子女の犠牲をみ社会問題化した。

時代に翻弄され続ける、近代奄美の実態と、進学エリート層の歩んだ光と影、さらに彼らが望郷の念で結成した、郷党活動から島民のパトリオティズムを考察する。

I: 「学問の世」の登場



1979年、与論島・茶花港のハシケ輸送。港湾整備が立ち遅れた奄美諸島では1970年代末までハシケに依存した。また最近までその旅立ちには、親族一同で「死の盃」を交わし合った。

「出稼ぎ時代」の残したもの 気づけば同床異夢…

「奄美」を媒介に、強い郷土愛で結び合ってきたはずの奄美人。しかし時代の波や、理想と現実の懸隔は、いつしかその「郷土愛」を変容させて…



名瀬湾沖の立神。島びとの旅立ちを見送り続けて来た。

「学問の世」来るといふ維新後の覚醒は、旧支配層が子弟遊学で復権を目指すサバイバル戦略だった。彼らの一部は期待に応え、立身出世、郷土青年の指針になった。一方、特権層に搾取され、家族ぐるみで出稼ぎに出た貧困層は、差別と偏見に耐えて団結、身を削って郷土送金し、ふるさとを支え続けた。因果としての甲乙二者は、時を違えて大都市で出会いながら、その相克を乗り越え得なかった。そこにパトリシズムの異夢を見る。そして今日、「ふるさと」は幻想と化しつつある。

「右」に急旋回した 奄美復帰運動

動

中央政官界で活躍した奄美出身者で、特記すべき一人は金井正夫だ。戦後、奄美復帰運動が左傾化し、1951年、のサンフランシスコ講和条約に於ける第三条(国連信託統治)に地元奄美は絶対反対の意思統一を図ったが、金井は信託統治案は国連のソ連反対で成立不可能で、むしろ米提案に同意することが復帰への近道と、外務省の意向を受けて地元説得。結果、奄美復協の三条絶対反対は運動の分裂を招き、右傾化して国と同調して現実的な復帰を獲得する方向へ急転換、沖縄を置き去りに奄美復帰が1953・12・25に実現する。

奄美島民の政治選択は、反体制と体制迎合が交互する。権力層が右で、貧困層が左に傾斜しがちなのは長い「植民地の馴致」結果とも言える。こうした日和見主義的な時代の選択が、近代奄美を左右し続けるが、その右傾化推進者の一人が金井だった。



金井正夫(1915-1979)は龍郷村浦出身。旧制五高から関大、京都帝大法律学科卒。裁判所判事から弁護士へ。1928年、代議士当選、連続4回。近衛内閣で大政翼賛会委員を務めたことで、戦後、和歌山県知事を公職追放された。

東と西、地元進言で一時対立も

戦後、同郷者の生活擁護にGHQからの援助物資払い下げへ、神戸で「奄美連盟」が結成された。全国組織化へ「尼崎の有志が東京へ行ったが、『お前たちの集まりは三国人的で共鳴できない』」と拒絶され、両者には不信感が残ったという。(『奄美復帰30周年神戸奄美会記念誌』)



奄美復興促進会(奥山八郎委員長)が昭和29年5月、上京中の保岡武久代議士も参加して開かれ、保岡氏が復興事業を鹿児島県を主管とする自治省原案に理解を求めたのに対し、奥山氏らは「微力な県庁任せでは不安。国直轄で」と強く迫り、論争6時間の末に物別れに(旬間紙『奄美』)

在京エリート層の集団「東京奄美会」。戦後の本土分離中も日本復帰を求める運動の第一線で活躍したが、必ずしも郷土側や、出稼ぎ者主体の関西の郷友会とは以心伝心とはならなかった。それは、真の使命感からか、根っこの特権層意識からか…

郷愛の すれ違い

「東京奄美会」の功罪

エリート集団化に離反

遊学生らが結成した東京、出稼ぎ者が職場・出身集落単位で発足させた関西…。郷友組織の生い立ちからして、対照を成した。



阪神西阿室郷愛会(1928年設立)

「(創設間もなくは)郷里に在住する親の肩代わりとして村民税を役場へ送金、防波堤、新道、奉安殿建設などの寄付活動、戦後はピアノ、体育館建設などに協力、愛郷心を発揮した」(創設50周年事業趣意書)

零落した芸術家志望の先輩

「豊彦ムと遭遇したのは1931年の暑い盛りで…店舗の壁を塗装する男に私は『豊彦ム』と叫んだ。

『彫刻家になったと聞いたけど』『一度の入選で彫刻家面はできない』。…やがて病妻が旅立ち『名瀬に帰る。都落ちだ』。私は返す言葉がなかった」(和野秀彦『死の淵』)

貧窮の中で送金、都落ち…もう一つの出郷者たち

奄美郷党組織の魁

大島郡青年会から東京奄美会へ



東京上野の韻松亭

■ 1898年7月、熊本五高から東京帝大に進んだ泉二新熊が当時のニコライ新学校生・昇曙夢、東大文科・大島直治らの交流を始原に、翌年1月、上野・韻松亭で新年宴会。遊学上京者の増加と共に1904年、「在京大島郡青年会」が結成された。

■ 青年会は「人材の郷」の評価に沿うべく、1913年、在京実業人の篤志を継いで「大島郡奨学会」を創設、上京苦学生の生活を支援。また会を学生層から拡大、「東京奄美会」に改称、盛況を極めた。

■ 奄美会では泉二大審院長収入祝賀や五輪選手・村上清信氏の壮行会、戦後は祖国から分断された奄美群島の早期復帰運動を展開した。

泉二さんには類まれな郷土愛があった。明治31年に上京されてから、泉二さんの肝煎りで上野公園はじめ市内各所で郷里出身の青年の会合がしばしば開かれ、相互の親睦を敦うし提携を密にすることに少なからず寄与、ついに泉二さんを会長とする常設的な大島郡青年会が組織せられ今日に及んでいる。

(大島直治『泉二博士と私』)

III: 同郷者のパトリオティズム



刑法学者・泉二新熊は真に愛郷者だったという。
東京で大島郡青年会を結成、奄美の屋敷は集落に
寄贈、今も石碑が生地を見守っている。

立身主義とは何だったか…

戦時体制に絡み取られ 厳しい戦後の評価…



大島家一族の不運は仙蔵35歳、直道41歳、仙蔵の子・辰二郎(内務省衛生局長)44歳と、3人もが夭折したことだ。その中で長命した直治は1925年、美濃部達吉後任で九州帝大法文学部長に抜擢されたが、大学騒動の皮切りの「九大事件」時には「忠君愛国の老儒家」と揶揄され、社会主義者の教授・高坂逸郎らとも対立した。同様、直道も生前、警視庁で高等警察を担当、政財界に食い入り、周囲から警戒されるなど、民主思想とは相いれなかった。

一方、直道の子で京都大哲学科入りした康正の名が浮上するのは、戦前のいわゆる「京都学派」の動静で、西田幾太郎を支持する哲学者グループが海軍と秘密会合を重ね、対米戦回避を協議。これに事務方として京大助手・康正が加わっており「大島メモ」が戦後話題になった。また泉二新熊は「泉二刑法」と呼ばれる法理論で注目されたが、枢密顧問官になったことで戦後、公職追放に。子や妻に先立たれ失意のうちに没した。

奨学で労働回避の気風

大阪毎日記者・下田将美『南島経済記』(1927年)

「私は大島に奨学の気風の盛んな事を悦しいことに思う。しかし、その奨学が労働回避になる時、大島は不幸の陥穴に自ら落ちるのだと評さざるを得ない。その土を耕し、その国土から実益を産ませることが、大島の今日の何よりの急務である」

資源なく教育投資

評論家・大宅壮一『大宅壮一選集』(1949年)

「この島には資源らしきものはほとんどない。あるのはただ、人的資源のみである。しかも、ここの住民は、この資源の開発には、日本中のどこよりも熱心である。というのは、鹿児島県出身で『お国自慢』の対象になるような人物は、軍人を除いてはほとんどは奄美大島生まれだからである。戦前、旧制中卒の75%は上級学校に進学していたが、本土平均25%に比べ著しい開きがある。徳之島・亀津町のごときは大学卒が人口比、全国最高を示している。奄美の教育投資は、出血投資、飢餓投資、だともいえよう」

新たな苦難の一因に

遊学者家庭 も出稼ぎ…



志ついえ親苦しめ…

「本郡より笈を負うて他郷に遊学するは、多くは法学研究に在りという。しかし成業して錦を故郷に飾る者は暁天の星にして、多くは学資続かず、半途帰村し遊食の民となり、父母を苦しめ弟妹を苦しめ、終に他の指弾する所となり…」

(『鹿児島新聞』1904年)

家産傾き一家で都会へ

「大島の父兄は子弟教育の為に、父祖伝来の家産を空しうする者が少なくない。かくして家産を傾け尽くした後は、一家を挙げて都会に出て、いわゆる工場労働者の群れに入って惨苦の生活を営みながらも、『子弟教育の為』と誇る」

(月刊誌『奄美大島』1926年)

立身出世者たちの憂慮

もとじ・しんぐま(1876-1947) 日本の裁判官、官僚、刑法学者。検事総長、第20代大審院長、枢密顧問官。五高-東京帝大卒。奄美大島・龍郷村中勝出身。叔父の大島信は駒場農学校卒、内務省入り後、国会議員。



☆大島直治『泉二博士と私』

泉二さんは郷里・中勝から名瀬に遊学…毎日夜が白み出すと、誘い合って小学校長の郷先生が出勤される前に通って「鹿児島外史」などを教わった。

☆元田弥三郎『奄美と法曹のひとびと』
司法界の大御所が奄美出身者であるが故に、奄美人の思慕の的、若人をしてその道を歩ませ、その道に近づくことのイメージを描かしめ、あるいは理想を抱かしめた。

「無暗に都会に出るな」

泉二信熊らの警鐘

「私が郷里を出て、初めて上京したのは明治23年、15歳の時でした。その時は在京出身者はわずか10人くらいのものであったが、大正10年ごろには著しく上京者が増え、郷里は土地荒廃し、中堅青年を失うといふ傾向を呈し、喜界島の如きは最も甚しかったようである。それで、小学校の教員に対し、児童に無暗に都会に出るな、郷土を愛せと諭すよう奨めたこともある」
(月刊誌「奄美大島」1926年6月号)

II: 進学熱の反動



世界三大織物のひとつ「大島紬」。近代、泥染め、高機などの改良で、1895年ごろから需要が拡大、新たな産業として全島で主婦、子女が織子に従事。家計を支えた。



徳之島・亀津村の教育熱

ヤンキチとは茅の屋根を支えている垂木、シキバンはお粥のことです。ヤンキチシキバンは「屋根の垂木が映るほど薄いお粥」という意味。この言葉には、貧しい生活の中にも「自分達はヤンキチシキバンを食べても、子ども達に学問をさせたい」という、親の強い思いが込められています。その思い・苦勞に応えるべく子ども達は懸命に勉学。当時の亀津村は、人口に対する大学進学率が全国一であったことから「日本一の学士村」と言われました。本土との行き来が不便であった時代、若者達は高い志を以て島を発ち、徳之島から教育・法曹・行政等の各界に多くの人材を輩出しました。(徳之島町教委・社会教育だより。平成30年10月号)

粗食に耐えて 「日本一の学士村」に

「学問の世」への憧憬、挑戦は島都・名瀬に留まらなかった。徳之島でも子弟を本土遊学させ、留守家族は粗食に耐えた。結果、弁護士など多くの人材が輩出され、「学士村」と評されるに至った。

大島兄弟と薩摩閥

奄美からツテなく上京、桂玉之艱に耐えて自歩を築いた大島直治・直道兄弟。それは兄・仙蔵の人脈遺産を頼り、とりわけ薩摩閥の温情にすがり、その保護下で学業に励み、人生を前進させるものだった。



大久保利武夫妻の媒酌で挙式した大島直治



大島直治



大島直道

上京した直治は**大久保利通**一族の紹介で赤星家の家庭教師に。東京帝大哲学科を出て七高造士館教授に。30歳時に**大久保利武**夫妻の媒酌で結婚。米英留学を経て九州帝大教授に。後に北九州大学長。倫理学。

一方、四歳違いの弟・直道は**樺山愛輔**の援助で鹿児島の中學に進学するがストライキで放校処分。上京し、日本郵船・須田利信の世話で大成中へ。七高、東京帝大卒業後、内務省入り。広島県警察部長に。

欧米視察中、病を得て兄が遊学中のベルリンで療養中に、客死。40歳。兄は最愛の弟を介護、その死を看取った。

奄美人の気概 示す逸話も

謹厳実直な兄と対照的に豪放磊落な弟・直道。鹿児島一中時代、奄美出身者が「島人」と蔑視される様に憤慨、番傘に「大島人直道」と大書し天文館を闊歩。腕力無双で多くの武勇伝を残した。

山陽鉄道の技士長 仙蔵の鉄道拓く

民鉄会社・山陽鉄道は1888年設立、瀬戸内海沿いを並走し、九州を結ぶ重要路線を敷いた。これにより広島が物流拠点に発展し、日清戦争では門司を結び、輸送力が威力を発揮する。仙蔵は同社技術陣の期待の星として採用される。



大島仙蔵

奄美を出て鹿児島本学校、工部大学土木工科に学び、卒業後は助教授、さらに渡米してペンシルベニア鉄道で実地を学んだ仙蔵。乞われて開設間もない山陽鉄道に入社、技士長兼建築課長として難工事続きの鉄路建設の一線を担った。

しかし、病魔に憑りつかれ1893年、35歳で若死する。父・直佐登は神戸に駆け付け臨終の我が子と対面。この時、20歳年下の直治を伴っていた。直治はその死を看取り、一家の不運を発奮材料に、自らの使命を自覚、学問で前途を拓いた。

激動期権力層・大島家の栄枯

大江直佐登

(名瀬方戸長 1834-1910)

II
麓良雄3女・徳千代

※大江家は奄美大島・大和浜の豪農分家だが、南部の名家・西家から嫁いだ母親は誇り高く、直佐登に期待を託し、当時流刑中の重野安繹(歴史学者)に学ばせ、島役人へ。やがて戸長、島庁商社掛として辣腕を振るい、砂糖収奪を陣頭指揮。維新後の勝手世運動では人民派の弾圧に加わり、歎願団が上鹿すると、先便で鹿児島藩庁に駆け込み、全員を投獄させた。丸田南里らを「奸謀の者ども」と敵視、対峙し続けたが、人民派の勝利で官職を解かれ蹉跌をきたした。このため子弟を相次いで本土遊学に送り出し、自らは一族の広大な農地でサトウキビ栽培、生産ランキング上位に名を連ね再起を賭けた。

※大島姓の嚆矢(在番に伴われ鹿児島本学校へ。大山巖に随伴上京)

大島 仙蔵

(1859-1893)

工部大学校卒
ペンシルベニア鉄道
山陽鉄道技術課長

大島辰次郎

(内務省衛生局長)

大島午三留

(台湾司法官)

大島 直治

(1879-1967)

大島高等小から大学予科
卒業学力検定試験に合格
東京帝大文科大学哲学科卒
第七高造士館教授
九州帝大教授・北九州大学長
(倫理学)

大島毅一

(八幡製鉄)

大島隆夫

(大蔵省印刷局長)

疋田平三郎

(九大医学部教授)

大島 直道

(1883-1923)

東京帝大政治学科卒
広島県警察部長
内務省勅任参事官
ベルリンで客死

大島康正

(東京教育大教授)

大島信徳

(東大工学部教授)

大江直佐登は、学問による一家の栄達を図るべく、俊秀の誉れ高かった仙蔵を遊学に送り出した。その仙蔵が若死すると、弟らが志を継いで上京、学府や官界で活躍、島民の注目を集めた。以降、一般家庭からも進学熱が盛り上がりを見せていく。

戸長・大江直佐登の浮沈

大和浜・大江家…(母方)伊子茂・西家



1834年生 **直佐登**

(遠島中の歴史学者・重野安繹から手習い)

島役に登用

名瀬戸長に累進

1875(明治8)年



「奸謀のものども」

**勝手世騒動
が勃発**

役人ビキ頭目として
人民ビキを弾圧

人民ビキの勝利で解任・挫折
サトウキビ農家で出直し・子弟教
育



「学問の世」

大江家からは大島仙蔵、直治、直道らが遊学



明治6-10年の間、鹿児島県の奄美統治は西南戦争などの混乱から、県役人が引き揚げ、空白化。この間、島役らに実権を握り、大江直佐登、基俊良ら戸長が黒糖の収税業務を担い、島民

栄華の夢跡 大和村役場に隣接する空き地は豪農の一つ・和家の屋敷跡。今は石塀を残すだけ。



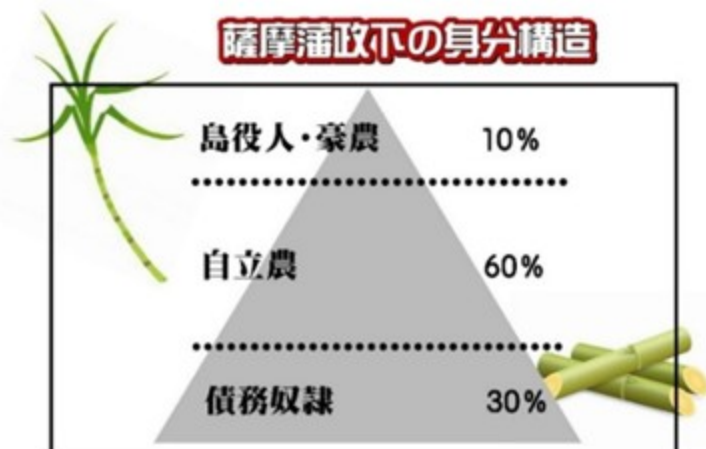
権力者を輩出した大和浜集落

大和村は東シナ海に面し、背後は急峻な山に阻まれ耕地が乏しい。しかし、その中心地・大和浜には太家、和(にぎ)家、住家、城(きずき)家など豪農が割拠。多くは島役として赴任後、大地主に変貌しており、富の源泉が権力にあったことを示す。太家は大和浜だけで60人のヤンチュを抱えており、その一族からも大江家など島役への登用者が出て、権勢をふるった。



奄美の支配層…島役と豪農

薩摩藩政下の身分構造



1609年、奄美を琉球国から割き取った島津氏は、初期こそ首里王府時代の与人役などを継続起用したが、サトウキビ作の本格化とともに、抜荷防止や増産に島民による島民監視システムを構築。集落内まで島役を配置し、間接支配。その役職には豪農子弟が多く起用された。また維新以降には、島役らの一族から本土遊学者が相次ぎ、学問で立出世を遂げる、新たな活路を拓いた。

薩摩藩政下の奄美支配体制

(「笠利町誌」)

